

ジェンダーと会話終結のストラテジー

佐々木道子

キーワード： gender, closing strategy, politeness, power, solidarity

0. はじめに

本稿は、日本語の会話終結ストラテジー (closing strategy) にどのような男女差が現れるか、また、そういった男女差に、男女のポライトネスに対する意識の違いがどのように関わっているかを、明らかにすることを目的とする。

会話終結という行為は、元来、対話者の面子 (face) を脅かす危険性を伴う行為 (face threatening act : 以下FTA) である。したがって、人間関係を損なわずに会話を終結させるために、通常何らかのストラテジーが用いられている。

男女の会話スタイルの違いに関して、Tannen (1990) は、男性の会話スタイルは report-talk (上下の権力関係 (power) を重んじる社会的会話スタイル) であり、女性の会話スタイルは rapport-talk (連帯感 (solidarity) を重んじる私的会話スタイル) である、と説明している。

本稿では、この男女の会話スタイルの違いが日本語の会話終結ストラテジーにも反映されていることを、アンケート調査によって収集した会話の前終結部 (pre-closing section) の発話データを分析することにより示す。また、日本語においては、男女の間に積極的面子 (positive face) に対する意識の違いがあることを明らかにする。なお、分析には、Brown & Levinson (1983) らによって提唱されたポライトネス理論を用いる。

1. 理論的背景

1.1. 会話の終結部

Sacks & Schegloff (1973) によると、会話には終結部 (closing section) と呼ばれるべき部分が存在する。会話において適切に終結 (closing) が達成されるためには、先ず一方の話者が、前終結開始の表明 (pre-closing statement) と呼ばれる、会話を終結に導くはたらきのある発話を導入し、会話を終わらせたい意志を表明し、会話において新たな話題が展開されることを防ぐ。この言語行為が適切に遂行され、発話者の意図が対話者が理解することができれば、前終結 (pre-closing) と呼ばれる、会話を終結へと導くためのやりとりが双方の会話参加者の協力のもとに行われ、会話終結が達成される。この前終結から、会話終結に到るまでの一連の言語行動によって成り立っている部分が、終結部である。本稿において考察の対象にするのはこのうち前終結の発話とする。

1.2. ポライトネス理論について

ポライトネス (politeness) とは、言語表現上の丁寧さととどまらない、よりよい人間関係を築くための丁寧さのことである。Brown & Levinson (1983) は、対話者の面子 (face) を守りよりよい人間関係を築くための言語使用上のルールとして以下のようなポライトネスルールを設定した。

Brown & Levinson (1983) より

- I. 補償行為を一切行わず、そのままを言う (without redressive action, baldly)
 - II. 積極的配慮を示す (positive politeness)
 - III. 消極的配慮を示す (negative politeness)
 - IV. 言外にほのめかす (off record)
 - V. 相手の面子を脅かす行為を行わない (don't do the FTA)
- (相手の面子を脅かす度合いが高い順)

面子は2種類の面子に分けられる。他人に認められたいという心理的側面が積極的面子 (positive face) であり、他人に束縛をされたくないという心理的側面が消極的面子 (negative face) である。対話者のそういった面子を守るための会話ストラテジーが、それぞれ積極的ポライトネスストラテジーと消極的ポライトネスストラテジーである。Brown & LevinsonのポライトネスルールのⅡが前者に、Ⅲが後者に相当する。

2. ジェンダーと前終結のストラテジー

堀口(1999)は会話終結の要因として(1)会話を終了しなければならない何らかの外的事情が存在する場合、(2)会話そのものがもう必要でない場合、の二つを挙げている。しかし、外的事情でもそれが対話者にとっても自明なものであるかどうかによっても、用いられるストラテジーが異なる⁽¹⁾と判断し、case1.対話者にとって明らかでない外的事情が存在する場合 (アンケート問3)、case2.対話者にとっても自明である外的事情が存在する場合 (同問4)、case3.会話そのものがもう必要でない場合 (同問5)の3通りの場合を設定し、アンケート調査によって会話前終結部の表現を収集した。

2.1. 調査の概要

調査は、1999年10月から11月にかけて、高校生以上の男女を対象に、アンケート用紙 (付記参照) の配付、送付により行った。配付は仙台市内で行い、回答者は概ね仙台市内に居住、通勤、通学をしている人々である。送付分に関しては、地域を北海道から東京都までの北日本に限定した。その結果、男性47名、女性48名の計95名から回答を得た。年齢別の内訳は、男性が10代12名、20代19名、30代8名、40代3名、50代6名で、女性が10代10名、20代22名、30代4名、40代5名、50代6名、60代以上1名である。

2.2. 分析

アンケート調査の結果、及び、先行研究の知見⁽²⁾を踏まえ、本稿においては、会話終結部に見られるストラテジーを以下のように分類する。

(a)理由表明

- ・理由提示のストラテジー (「8時に約束が」等、会話終結の理由を提示したもの)
- ・言い訳のストラテジー (会話終結の本来の理由以外のものを提示したもの)

(b)感情表明

- ・共感のストラテジー (「本当に賢い犬ですね」等、先行会話の内容 (ここではペットの話題) に共感を示すことによって結論を下したもの、もしくは対話者に感謝を述べたもの)
- ・勧誘のストラテジー (「そろそろ飯にしよう」等、対話者に対する勧誘を伴うもの)
- ・ほのめかしのストラテジー (「もうこんな時間だ」等、直接理由を提示しないもの)

- ・話題転換のストラテジー（「腹減った」等、先行会話とは無関係のものや自分のペットの話題への転換）
- ・直言のストラテジー（「お前、つまらないよ」等、会話に共感できない旨や、会話に飽きた旨を伝えるもの）
- ・謝罪のストラテジー（「ごめんね」「すみません」等の一般的な謝罪表現の他に、「失礼いたします」といった広義での謝罪として用いられるもの、及び「恐れ入りますが」「申し訳ありませんが」といった対話者の面子を脅かしていることに対する補償表現 (mitigator) を伴うもの）
- ・人間関係維持のストラテジー（「またね」「また今度お話しして下さい」「今度犬に会いに行くよ」「電話するよ」等、対話者との関係を今後も維持したい旨の表明）

これらのストラテジー毎に適宜具体例を取りあげ、分析を示す。

なお、例の前の括弧内は、初めの数字がcase何番における回答かを、続く漢字は、対話者が誰であるか（上男＝目上男性、上女＝目上女性、等男＝対等男性、等女＝対等女性、下男＝目下男性、下女＝目下女性）をそれぞれ表す。後の括弧内は、初めの数字が年代を、次のアルファベットは性別（Mは男性、Fが女性）を、最後の数字は、筆者が集計をとった際の年齢毎の整理番号をそれぞれ表している。例えば（2.上男女.等女）「○△□」（50F3）は、case2のような場合、目上の男性、女性及び対等の女性に対しては「○△□」という発話をするすると50代女性回答者の整理番号3番が回答した、ということの意味する。

2.2.1. 理由表明

会話を終わらせる理由を述べる際の表明の仕方に比較的はつきりと男女差が現れている。どのような男女差が現れるかを理由を提示する場合、言い訳をする場合の2つに分けて見ていこう。

2.2.1.1. 理由提示のストラテジー

case1は8時に大事な約束があるため会話を終結させなければならないという場面設定である。その理由の表現として次のものがある。

- 例1 (1.上男女)「すみません。8時に人に会う約束をしているので」(20F19)
 (1.等男女)「ごめん。8時に約束あるから帰るわ。じゃーね」(同上)
 (1.下男女)「ごめんね。ちょっと用事があるから。そろそろ帰りたいんだ」(同上)

いずれもcase1における20代女性の発話である。この回答者は目上の対話者に対しては「8時に人に会う約束」と、時間や約束の内容まで述べているが、対等の相手に対しては「8時に約束」と約束の時間のみを述べ、目下の相手に対しては、「用事」としか述べていない。この女性は相手が目上になるほど、会話を終結させなければならない外的事情を具体的に述べている。目上の対話者に対しては「約束」という語を用いて、時間や約束の内容まで話しているが、対等、目下となってくるに従って、「用事がある」等、理由の述べ方が曖昧になっている。目下の相手に対しては、ある程度まではFTAを行うことが許されるが、目上の対話者に対しては、会話を終わらせるだけの正当な理由を述べ、対話者を納得させることで、対話者の積極的の面子を脅かさないようにしなくてはならないからである。

次は男性の例である。

- 例2 (1.上男女)「すいません、用事があるので帰らせてもらいます」(10M10)
 (1.等男女.下男女)「用事があるから帰るよ」(同上)
 (1.上男女)「所用がありますので、失礼させていただきます」(50M4)
 (1.等男女.下男女)「用事があるので、この辺で」(同上)

この10代、50代の男性は、「用事」「所用」という会話終結の理由をばかす語句を用い、「8時」という約束の具体的な時間の提示も行っていない。例1、2を比較すると、例1の女性の発話の方が会話終結の理由をより具体的に述べていることが分かる。全体的な傾向として、男性の発話には「用事」や「私用」「所用」等の語句が多く用いられ、「約束」という具体的な言葉を用いているものは女性よりは少ない。「8時」という約束の時間を提示する率も女性より若干低く、「人に会う」等の約束の内容まで示したのも女性より少ない。

女性は自分の私的領域をきちんと説明することを丁寧と捉え、男性は私的領域を他人にはあまり見せずに対話者との距離を保つことによってポライトネスを実現しようとしている。

2.2.1.2. 言い訳のストラテジー

case3は会話を終わらせるだけの決定的理由が存在しない場合である。しかし、FTAの度合いを緩和するためには何らかの理由の提示が行われなくてはならない。理由の提示の仕方として、男女とも多く見られたのは、以下のような形式である。

- 例3 (3.上男女)「申し訳ありません。これからちょっと用事がありますので失礼いたします」(40F3)
 (3.等男女)「ごめん、ちょっと用あるから帰ってもいい？」(20M8)

40代女性と、20代男性の発話である。上の2人はいずれも、「用事」「用」という言葉を用いて、理由を提示している。これらは具体性に乏しい語句であるため、具体的な理由を提示した発話に比べて、対話者を納得させる度合いは低く、発話のFTAの度合いはやや高くなる。したがって、いずれの発話も、FTAを緩和するため、「申し訳ありません」「ごめん」という謝罪表現を伴っている。

FTAの度合いを下げるためには、相手を納得させるだけの具体的な理由を無理にこじつけてでも提示しなくてはならない。具体的な理由を提示するとき、その提示の仕方に男女差が現れる。

- 例4 (3.等男女)「幸せの青い鳥を探すのでこのへんで。ではまた」(20M12)

20代男性の対等の対話者への発話である。「幸せの青い鳥」という具体的な語句を用いている。しかし、これは明らかにジョークである。ジョークを述べることは、対話者と会話の前提知識を共有していることや、対話者との社会的距離が近いことを指標する積極的ポライトネスストラテジーである(Brown & Levinson 1983 ; 124)。ジョークを述べるストラテジーは女性には見られない。ジョークを述べて会話終結の理由をばかすことは、会話を終えるだけの然るべき理由が存在しないこと、また、対話者と会話を続けたくないことを含意しうるため、対話者の積極的面子を脅かすFTAともなりうる。したがって、このストラテジーの使用は、対話者が親しい相手である場合にのみ許される。この例のように、男性は、親しい相手に対しては、FTAを伴う積極的ポライトネスストラテジーを用いることがある。女性は親しい相手であっても、FTAが伴うような形での積極的ポライトネスストラテジーは

用いない。

次のような男性の前終結の発話がある。

例5 (3.下男)「見たいテレビがあるんだよねえ」(20M10)

具体的かつ、もっともらしいと考えられる理由が述べられている発話である。男性は対話者へのFTAとなりかねないような発話も自由に用いることができるため、対話者の面子に配慮した具体的理由を述べている例は、女性より少ない。

次の女性の発話も見よう。これは男性のストラテジーとは対照的である。

例6 (3.等男女.下男女)「ごめん！これから親がうちくるから帰るね。遅れるとまずいしー」(10F4)

(3.上女)「今日は食事当番なので早く帰らないと」(20F1)

(3.等女)「ごめん、そろそろだんなが帰ってきそうなんで帰るね」(30F1)

(3.等男)「ごめんね、子供が帰ってくるんで」(40F1)

(3.等女)「姑の迎えがあるので」(50F3)

10代から50代までの各年齢層の発話である。これらの例から分かるのは、女性は会話終結の理由を提示しなければならない場合、家族などの第三者を理由として掲げることが多いという事実である。自分の都合ではなく、家族や食事を待っている仲間のために会話を終えなくてはならないという理由を提示することによって女性は、自分自身と対話者の人間関係を守ろうとする。自分の都合で会話を終わらせたいと思っていることが対話者に伝われば、それは対話者の積極的の面子に対するFTAになる危険性があり、連帯感を損なう恐れがあるからである。家族など第三者を引き合いに出す言い訳のストラテジーは、対話者が女性であるときにやや多く見受けられた。女性同士は普段から家族が話題に上ることが多く、十分な共感が得られると考えるからであろう。

さらに女性は会話を終わらせるだけの正当な理由(8時に大事な約束)があるcase1においても、敢えて本来の理由とは異なる理由を提示している例が見られた。

例7 (1.上女.等男)「夕食の支度がありますので」(50F3)

(1.上男)「すいません。家でマリーが待ってますので」(20F22)

(1.上女)「すいません。門限が厳しいのでそろそろ・・・」(同上)

ここでは、8時に大事な約束があるという、会話を終わらせるだけの正当な理由がある。にもかかわらずこの女性達は、「約束がある」という理由を提示せずに「夕食の支度」「マリーが待っている」「門限が厳しい」等、別の理由を述べている。しかし男性はcase1において、本来の理由以外の理由を提示した回答者はいない。女性は、自分の都合である本来の理由より、第三者を加えた理由にして述べた方がより丁寧であるという意識がある。

男性は理由がないときにFTAとなる発話を用いることがあるが、女性にとっては会話終結の際に、自身が会話終結の責任を負うことで対話者との連帯関係を損なうことは回避されなければならないからである。

2.2.2.感情表明

本節では、感情を表明し、FTAを緩和することで会話を終結に導くストラテジーとして、共感、勧誘、ほのめかし、話題転換、直言、謝罪、人間関係維持の7つのストラテジーを分析する。

2.2.2.1. 共感のストラテジー

女性に多く見られたストラテジーに、対話者の話していた話題に共感を示すことで、会話を終結に導くストラテジーが挙げられる。具体例を見てみよう。

- 例8 (1.上男女)「本当に可愛いですね。済みません。ちょっと予定が入っているので失礼します」(40F3)
(2.上男女)「犬にもいろいろ個性があってすごいですね。もうこのバスに乗らないといけな
いので。失礼します」(20F20)

case1、2における発話である。case1、2はいずれも会話を終結させるだけの正当な理由が存在している場合である。それにも関わらず、理由の提示に先がけて、回答者の女性達は話題への共感を示すことで、一旦先行会話を取りまとめている。しかも、いずれも対話者のペットの犬を褒めている。褒め言葉を前置き連鎖 (pre-sequense) として用いることで、対話者の積極的面子への配慮を見せている。

次はcase3における発話例である。

- 例9 (3.上男女)「すごくいい犬ですね。今度会わせて下さいよ。私そろそろ帰りますね」(10F9)
(3.上男女)「本当にりこうな犬ですね、うちの犬とは大ちがいです」(20F2)

先の場合と同様に、対話者は自分より目上の場合である。ここでは、会話を終結させるのに十分なだけの外的事情はない。したがって会話を終結させるためには、会話が結論に至ったことを示せば良い。対話者の話題に共感を示すことによって会話を総括するストラテジーは女性に多く見られたことは先に述べたが、特に目上の相手に対しては、女性はペットを褒める発話から前終結を開始する。

またこの2つの例が先の例8の2つの発話と異なっている点として、ここでは対話者に対する謝罪表現が現れないということが挙げられる (case3において謝罪表現を用いていない女性はこのストラテジーを用いていることが多かった)。ペットの自慢話をしている本人は、自分のペットがいかにすばらしいかを聞き手にも共感してもらいたいはずである。したがって、対話者のペットを褒めるという行為は、「共感、理解、協力を示すことで聞き手の欲求を満たす」(Brown & Levinson 1983; 129) という積極的ポライトネスストラテジーとなる。女性は、謝罪表現を用いなくとも、連帯感を示す表現の使用によって相手の積極的面子を満たすことで、会話を友好的に終結へと導くことができる。なお、このストラテジーは女性は目上の相手に対して用いている例が多く見受けられた。

男性の例も見よう。

- 例10 (2.下男女)「かわいいね、バスが出るのでまたね」(40M2)

対話者は目下の男女である。この男性は、対話者のペットを褒めるという共感を示すストラテジーを用いているのみならず、「かわいいね、～またね」と「ね」形の表現を2回繰り返し、対話者に呼び掛けるような表現形式をとっている。先に見た女性の発話と同様に、連帯感をこの発話は表そうとし

ている。しかし、男性は、女性の場合とは異なり、ペットを褒めることによって対話者への共感を示すストラテジーを目上の相手に用いている例はなく⁹⁾、対等、目下の相手に対して数例用いているのみであった。男性にとっては、言語表現上に連帯感を出表することを極力おさえて、相手の消極的面子への負担を軽くすることが、言語表現上に親しさを表出することより優先されるポライトネスルールだからである。したがって、男性は目上の相手に対しての前終結の表現として、人間関係を言葉で確認するような積極的ポライトネスによって対話者の消極的面子を脅かすことを回避し、単純かつ、人間関係を指標する機能がない表現を選択する。同調によって言語表現上に連帯感を出表することは、自分は対話者に対して、親しみの表出が許される地位にあるということも同時に示しうる。社会的距離を保つことが要求される男性は、相手を選ばずに対話者の話題に同調することを避けているのである。

また、会話への共感の示し方として、対話者に感謝を述べるストラテジーがある。対話者に対して感謝の表現を用いるストラテジーは女性のみに見られ、男性はcase1~3を通して、感謝の表現を用いている例はなかった。以下に女性の例を示す。

例11 (1.等男女,下男女)「いろいろ犬にも個性ってあるのね。またなんか教えてね。8:00にちょっと約束してたから。ごめんね、ありがとう」(20F20)

この例の場合、約束を控えているので、対話者の長話は迷惑であるにもかかわらず、この回答者は、対話者への共感を示し、感謝を述べることによって発話を結んでいる。発話の最後に礼を述べることによって、この回答者は、対話者への共感を示し、連帯感を強く印象づける形で会話を終結させようとしている。会話の前終結において、女性の発話には、「ありがとうございました」「お世話さま」等の語彙が、対話者から恩恵を受けたという前提条件もなく出現する。また、この例は、対話者への共感を示すことから始めて、会話終結の理由の提示、謝罪、人間関係確認、礼を述べる、と前終結を非常に念入りに行っていることが分かる。

以上の議論から、一般に女性は、男性より前終結を念入りに行っているということが言える。女性は、自明のことであっても言葉に出して、対話者への共感を示すことによって会話を終結させようとする。反対に男性は、自明のことを取って口にするより、相手に対する拘束が少しでも少ない形を選択し、相手の消極的面子を守ることによって、会話を終結に導こうとしていると言える。

2.2.2.2. 勧誘のストラテジー

先行会話の内容を直接取りまとめなくとも、会話を終結させるよう勧誘することによって終結を導くストラテジーがある。下の2つの発話がその例である。

例12 (2.下男)「バスの中で話さない？」(20M10)

(3.等男)「あのさ、話の途中で悪いんだけど、なんか腹減らねーか？メシでも食いにいこうよ」(20M4)

いずれも男性の発話で、対話者は対等及び、目下の相手である。この2つの発話は、対話者と会話を協力して終わらせようという勧誘表現の形を用いている。会話を自分から終結させようと申し出るとは、対話者の面子を脅かす度合いの強い行為である。そのため発話者は、勧誘というストラテジーの形で終結の意志を申し出ること、自分1人の都合ではなく、対話者との相互の合意によって会話

を終結させようとする。対話者の協力によって、会話を終結させれば、会話終結行為のFTAとしての度合いは、会話を終結させたい旨を直接申し出る場合よりは低くなる。したがってこの戦略は、(20M10)の発話のように、謝罪表現などの補償行為を伴わない形で用いることも可能である。

この勧誘という戦略は「対話者が自分と共通の基盤にあること」(Brown & Levinson 1983)を示す、積極的ボライトネス戦略である。さらに共同作業において自身が主導権を握ろうとする戦略でもある。従って対等以下の相手に用いられる。ただし、例11の発話のいずれの表現形式も疑問文の形を取り、会話を終結させる共同作業に参加するかどうかの選択の余地を相手に残す形で示されている。対話者に選択の余地を残し、対話者の心的負担を軽減するという消極的ボライトネス戦略と併用することで、男性はあくまで連帯感の押し付けを避けている。この、対話者との共同作業で終結を導こうとする勧誘という戦略は女性には見られない戦略である。女性は、対話者に積極的に働きかける戦略によって、対話者の消極的面子を脅かすことを避けようとするからである。

2.2.2.3. ほのめかしの戦略

先の戦略とは異なって、会話を共に終結させるよう誘うことも、また、会話を終結させる理由を述べることもせず、自分が会話を終結させたいと思っていることを、暗にほのめかす戦略がある。例を見てみよう。

例13 (1.上男女)「あっ、もう7時半だ。すいません。ちょっと用事があるので」(20F14)

case1では、会話を終わらせるだけの正当な理由があるため、最低限、理由の提示さえ行えば会話は終結に向かうのであるが、前置き (preface)として「もう7時半だ」と時間に言及することによって、会話を終結に向かわせたいという旨を予めほのめかす戦略の使用が見られた。理由の提示をいきなり導入するよりも、理由提示に先駆けて前置き連鎖 (pre-sequence) を導入することによって、段階的に共通理解を作り上げていき、FTAの度合いを下げる戦略である。case1において現在の時間に言及した戦略は他に男性1名 (上男女. 20M6)、女性1名 (上男女.等男女.下男女. 20F12) が用いていて、男女差は見られなかった。

case3においては、提示すべき理由が存在しないため、case1よりもさらに、会話を終結させたいと思っていることを言外にほのめかす戦略の使用率が高くなる。ここで現れる表現は大きく分けて2通りである。1つは、「あら、もうこんな時間。ずいぶん話し込んだなあ」(10M12)のように、case1の場合と同じように時間に言及したもの。もう1つは、会話の内容に共感できないことを表明して、会話を終結させたいことを暗に伝えようとするものである。次はその例である。

例14 (3.等男女.下男女)「ちょっと自慢しすぎだっー」(20F2)

(3.等男)「あんまり犬、好きじゃない」(20F15)

(3.下男女)「悪いけど、犬はちょっと・・・」(50F1)

例13のいずれの発話においても、「ちょっと」「あんまり」等の対話者の面子を脅かすことを避ける緩和表現が用いられている。また、「悪いけど」も相手の面子に対する補償表現である。この「会話を終結させたい旨を暗にほのめかす戦略」は、主に対等以下の対話者に対して用いられる。特に女性は目上の相手には用いない。理由は、この戦略は、親しい相手以外には、補償表現

と共に用いられても、FTAとなることを避けられないからである。

例15 (3.等男女.下男女)「ふーん、犬のことはさっぱりわからないな、飼う気もないし」(30M1)

男性の発話である。この発話は、会話を終わらせたい旨や、相手の話題に関心がないことを直接伝えるには不十分である。しかし、補償表現は用いていない上に、「さっぱり」という否定を強める表現を用いていて、例13の女性達の発話に比べると、会話に共感できないことを比較的率直に伝えている。男性はこの「暗にほめかす」ストラテジーの使用を使用する割合は女性に比べて少ない。男性は女性に比べて、会話がつまらないことをはっきりと表明したり、会話終結へと対話者を勧誘したりするなど、もっと直接的なストラテジーを用いることが多い。

また、対話者への気遣いの言葉を述べることによって終結したい旨をほめかすストラテジーもある。

例16 (3.上女)「お時間だいじょうぶですか？」(30F1)

発話者の女性は、気遣いの言葉を述べて、対話者に自身が会話を終わらせたいと思っていることを気付かせると同時に、相手の積極的面子を損なうことを避け、FTAの度合いを緩和しようとしている。

対話者への気遣いを示しながら、相手の積極的面子に配慮する発話形式は、男性には見られなかった。男性は、対話者の積極的面子に対して女性ほど配慮していないことが分かる。

2.2.2.4. 話題転換のストラテジー

会話の前終結部の機能の1つとして、もうこれ以上新しい話題が起こらないように会話の方向付けを行うこと (Schegloff & Sacks 1973) が挙げられるが、case3においては、敢えて会話を終結させるために新しい話題を急に導入するストラテジーが見られた。

例17 (3.等男)「おまえにとってシュールって何だ？」(20M19)

(3.下男)「モンゴルの首都がアディス・アベバだって知ってるか？」(同上)

男性の発話である。先行する会話とはまるで無関係な内容の表現が、補償表現を一切伴わずに現れている。いずれの発話も対話者の積極的面子をあからさまに脅かしている。そのため、このような発話は、目上の対話者に対して用いられている例は見られなかった。会話の原理から大きく逸脱して、関連性がまるでないことを述べることで、会話を終結させたいという含意を生じさせると同時に、これらの発話は、自分と対話者の距離の近さを表出している。したがって、社会的距離の近い相手に対して用いられると、積極的ボライトネスを実現するストラテジーとなる。ただしこのストラテジーは同時にFTAともなりうるため、よほど親しい相手でないとは許されない。(20M19)は、case3において、対等及び目下の女性には「あ、オレこれから用事があるから、じゃあね」と、会話の原理を逸脱することなく、会話を終結させる事情を提示した上で前終結を行っている。この事実から、男性は対話者を選んでFTAを行っていることが分かる。

次は、女性の話題転換の例である。

例18 (3.上男女.等男女.下男女)「あのう、ポメラニアンとかウェルシュコーギーとか好きですか」

(10F2)

この回答者は、欄外に「と、問いかけて相手に乗ってこなかったらそこでうち切る」と書いている。ボメラニアンもウェルシュコーギーも犬であるから、この発話は、先行会話との関連性は保っている。この女性の発話は会話の原理からは逸脱していない。しかし、それらの犬の名前は誰にとっても一般的な語彙であるかという点、疑問が残る。これは、先行会話の流れには配慮しつつも、一般的でない犬の名等の相手が参加しにくい話題を導入することで、相手の順番 (turn) を終了させ、会話の主導権を奪い、会話を終結へと向かわせる戦略である。似たような例は男性には見られなかった。

女性はこの戦略を用いる場合も連帯感を意識していると言える。

2.2.2.5. 直言の戦略

さらにcase3においては、FTAとしての度合いが最も高い、直接、会話がつまらない、もしくは会話に飽きた旨を直言する戦略 (bald on-record strategy ; Brown & Levinson 1987) がある。

例19は、いずれも男性の発話である。

- 例19 (3.下男)「その話つまらないよ」(10M6)
(3.等男)「しつこいんじゃ、ボケ」(10M8)
(3.下男女)「つまらないからもう帰る」(50M4)

いずれも男性の発話で、対話者は対等の男性と目下の男女である。急な話題転換の場合と同様に、親しい相手に対して用いられれば、お互い遠慮がない間柄であることの確認となり、積極的ポライトネス戦略となるが、FTAとしての度合いが極めて高い行為である。目上の相手や異性には用いにくい戦略である。ところで、これらの発話は、一切の補償表現も伴っていない。男性の会話スタイルは女性の会話スタイルより対話者との上下関係によって大きく左右されることは先に述べた。逆に言えば男性は、親しい対等の相手や目下の相手に対してはFTAの度合いが大きい発話形式も許されると考えているようである。

女性は直言戦略をどのような形で用いているのかも見ることにしよう。

- 例20 (3.下男女)「っていうかさー、その話もう飽きたからー。ゴメン (後略)」(10F6)
(3.下男)「ごめん、犬の話あきちゃったから帰るね」(30F1)

(10F6)の発話は目下の男女に向けられているが、(30F1)の発話は目下の男性のみに向けられている。女性は、異性である目下の男性に対してこの直言戦略を用いる率が高い。しかし女性同士の人間関係においては、連帯感が重要視されるため、積極的面子は守らなくてはならない。そのため女性は、同性である女性に対しては、FTAの度合いが高いこの戦略の使用を避けようとする。また、女性がこの戦略を用いる場合、謝罪表現と併用して対話者の面子を守ろうとする。女性で謝罪表現を伴わずにこの戦略を用いている例はない。女性はFTAを行う際でも、補償表現を用いることで連帯感を保とうとするからである。

2.2.2.6. 謝罪の戦略

case2を題材に採り、具体的な謝罪表現の男女差について、考えていくことにする。対話者が目上の場合から見ていこう。

- 例21 (2.上男女)「すみません、このバスに乗りますので失礼します」(30M5)
(2.上男女)「すみません。バスきたんで、また。ごめんなさい」(40F1)
(2.上男女)「恐れ入りますがこのバスに乗りますので」(50F1)

この例における(30M5)及び(40F1)のように、目上の相手に対しての謝罪表現は、男女とも前終結開始の際に「すみません」という表現を用いた後にバスが来た旨を告げて、「失礼します」で締めくくるパターンが一番多く、10代、20代では、目上の相手に対する表現は男女で差がつかなかったが、30代以上で差が現れた。男性はあくまで「すみません」「申し訳ありません」と「失礼します」を用いて詫びている回答が多かったが、女性は「すみません」「申し訳ありません」はもちろん「恐れ入りますが」「せっかくですが」等の表現や「ごめんなさい」といった類の謝罪表現も用いる(30代以上の女性で2例あった)。男性では「ごめんなさい」という語彙は目上には許されない。「ごめんなさい」は「さようなら」同様親しさを表出する語彙であり、男性は目上の相手に対しては、あくまでも一定の距離を保つことが優先されるからである。

男性が謝罪表現を用いる率が低い目下の相手に対しての謝罪表現も見てみよう。

- 例22 (2.下男女)「悪い、このバスに乗るから」(20M8)
(2.下男)「すまん、失礼するよ」(50M2)
(2.下男女)「ごめん。あのバス乗るから。バイバイ」(10F5)
(2.下男女)「ごめんね。バスが来たみたい」(30F3)

いずれも目下の男女に対する前終結の発話である。この例に見られるように、男性が目下の対話者に詫びるとき、「悪い」と「すまん」を用いることが最も多い。(20M8)は、目上の男女に対しては「すみません、このバスに乗りますので失礼します」、目下の男女に対しては「悪い、このバスに乗るから」と詫びている。女性は「ごめん」「ごめんね」で詫びていることがやはり多いのであるが、男性は目下の相手に対してはあまり「ごめん」を用いない。

また、ここで興味深いのは、男性が対話者の性別によって表現を使い分けている事実である。

- 例23 (2.下男)「すまん。バスに乗らないといけないからまたな」(30M2)
(2.下女)「すみません。あのバスに乗るので、また」(同上)
(2.等男)「すまん、バスが発車するので失礼するよ」(50M2)
(2.等女)「すみません、バス発車しますので失礼します」(同上)

いずれも男性の例である。これらの回答者は男性と女性とに対して、ほぼ同じ内容を述べているが、用いている表現が異なっている。男性に対しては「すまん」という表現を用い、女性に対しては「すみません」という丁寧度の高い表現を用いている。男性は、対等や目下の対話者に対しては、相手の性別によって用いる表現を変えていることが分かる。また、男性には、目下の女性に対しては謝っていて、目下の男性に対しては「じゃあな」とあいさつのみで前終結を行っている例も1例(10M8)あった。男性は、FTAの許される親しい同性に対しては、補償表現を用いる必要を感じていないよう

である。女性は目下の相手には、対話者の性別によって、用いる言葉が異なる例は、ほとんど見られない⁽⁴⁾。女性は連帯感を重んじるため、目下の対話者には対話者の性別に関わらず、親しさを表出するような謝罪表現を用いるためである。

2.2.2.7. 人間関係維持のストラテジー

今後も対話者との人間関係を維持したい旨を伝えて、会話を終結に導くストラテジーがある。このストラテジーは特に、対話者の性別や、対話者と自分との上下関係によって、現れ方が異なる。対話者の性別によって異なる例を見てみよう。

- 例24 (2.下男)「あっ、オレこれに乗ってくから。じゃ」(10M12)
(2.下女)「あのさ、オレこれに乗らなきゃならないから、また今度ね」(同上)
(2.下男)「バスが来たので失礼します」(50F3)
(2.下女)「それじゃ又ね」(同上)

(10M12)、(50F3)のいずれも、女性の対話者にのみ「また今度ね」「それじゃ又ね」と、人間関係の再確認を行っている。男性は、対話者が同性である男性の時よりも、女性である時の方が人間関係維持のストラテジーを用いる率が高く、女性は同性である女性に対話者である時のほうが男性に対話者である時よりもこのストラテジーを用いる率が高い。男性は同性の親しい相手に対しては、言葉で確認しないことで、隔てのない間柄であることを表出する。したがって、男性は、異性である女性に対しては、連帯感を指標する表現を用いている。逆に女性は、連帯感をはっきりと表すことをポライトネスと捉えているため、対話者が親しい相手であるほど、人間関係を維持したい旨を表明するストラテジーを多く用いる。

次の例は男性の人間関係維持の表明である。

- 例25 (1.上男女)「あのう、申し訳ありませんが、八時に人と会う約束があるので、そのお話は次回お目に掛かったときにあらためてお願いします」(20M3)

この回答者は「申し訳ありませんが」「お目に掛かる」等、敬語を駆使し、最後に「お願いします」と自己の積極的面子を脅かすことによって、対話者と距離を取り、上下関係は保ちつつ人間関係を維持したい意志を表明している。10代、20代の男性は目上の対話者に対しても、比較的人間関係を維持したい意思を表明している。男性は30代、40代の社会性を要求される年齢層になると、目上の対話者に親しさを表出するような表現は用いない。男性は、対話者との社会的距離を保つことが優先されるポライトネスルールに従っているからである。目上の対話者には「またね」等の表現は用いることができないので、男性は、女性よりも目上の相手に対して距離を取る表現を選択する。したがって、男性が目上の対話者に対して人間関係維持の表明を行うときは女性よりもいわゆる丁寧体の表現を用いる。

同年代の女性はどのように人間関係の維持を行っているのかも見てみることにしよう。

- 例26 (1.上男女)「すみません。今日8時から大事な用事があるので帰らなきゃいけないんです。また今度話しましょう」(10F9)

謝罪表現を述べて、会話を終結させなければならない事情を提示して、人間関係維持の表明を行っている、という点では先の男性の例とほぼ同じである。しかし、こちらの女性の発話の方が、対話者との距離は感じさせない。「また今度話しましょう」という表現は上下関係を表出しない言葉である。女性はやはり目上の相手に対しても連帯感を出し積極的ポライトネスを実現する表現を選んでいる。

女性の例をもう一つ見てみよう。

例27 (3.上男女,等男女)「すみません。まだまだボチの話を聞きたいのですが〇〇時に客が来ることになっていますので・・・次の機会に又聞かせて下さい」(50F4)

この例の他にも、女性には、「まだまだ聞きたい」旨を述べた後で「また聞かせて」欲しいと述べている例がいくつかあった。対話者の話題に興味を持っていることを示す点で積極的ポライトネスを実現している。

次の例も女性の発話である。

例28 (2.等女)「ごめんね。バス来たんで。またね。電話するから」(40F1)

case1において(10F10)も対等以下の相手に「後でTELでもするよ」と言っている。男性には「後で電話をする」といった内容のものは見られなかった。「電話するから」というストラテジーは女性独特のもののようなものである。男性は言語表現上にはっきりと親しさを表出するようなポライトネスは、相手への連帯感の押しつけとなり、対話者の消極的面子を脅かすことになると同時に、自らの消極的面子を脅かすので、「電話するよ」という表現を用いないと思われる。

3. おわりに

本稿では会話終結部のストラテジーの男女差から、男女のポライトネスの基準の違いを分析した。その結果、男性は言語表現上に親しさを表出しつつ会話を終結させることを避け、あくまでも、対話者との上下関係を基に、社会的距離を保つ表現を選ぶことによってポライトネスを実現しているということが明らかになった。一方、女性は言語表現上に親しさを指標する表現を選択し、対話者との距離を縮めようとすることでポライトネスを実現しているということが明らかになった。

さらに、男性は、前終結の表現を選択するにあたって、女性よりも対話者の性別や、上下関係を意識する度合いが高いことも示された。男性は対等以下の対話者に対して、対話者の性別によって用いるストラテジーが異なる場合が、女性より多い。これは、男性は、同性の対話者に対しては連帯感を表す表現の使用が上下関係により制限され、異性である女性に対しては連帯感を指標する表現を選択できるためであることを明らかにした。それに対して、女性は、対話者の性別や上下関係により、用いるストラテジーを変えることは少ないことも示された。これは、女性が、対話者に関わらず、言語表現上に連帯感を表す表現を選択しようとするためであることを明らかにした。

【付記】 アンケートの様式 (解答欄一部省略)

問1. あなたの性別をおしえてください。(あてはまるカタカナに○を)

ア. 男性 イ. 女性

問2. あなたの年代をおしえてください。(あてはまるカタカナに○を)

ア. 10代 イ. 20代 ウ. 30代
エ. 40代 オ. 50代 カ. 60代以上

問3. あなたは人と話をしています。相手は自分のペット (犬のポチ) の自慢話をしていて、いっこうに話をやめてくれそうにありません。時計を見ると7時半です。あなたは今日の8時に大事な約束があつてそろそろ帰らなくてははいけません。こんなとき、あなたなら、話を切り上げてもらうためになんと言いますか。相手が目上の男性、女性の場合、対等の男性、女性の場合、目下の男性、女性の場合の6通りを考えて下のカギカッコに入れてください。(必ずしも、全部が違う答えでなくともかまいません。言い訳や、嘘の口実など、御自由に考えてください。)(解答欄略)

問4. あなたは人と話をしています。ここはバス停で、あなたはバスを待っています。相手は自分のペット (犬のポチ) の自慢話をしていて、いっこうに話をやめてくれそうにありません。と、そこにあなたの待っていたバスがやってきました。バスは今にも発車してしまいそうです。こんなとき、あなたなら、話を切り上げてもらうためになんと言いますか。相手が目上の男性、女性の場合、対等の男性、女性の場合、目下の男性、女性の場合の6通りを考えて下のカギカッコに入れてください。(必ずしも、全部が違う答えでなくともかまいません。言い訳や、嘘の口実など、御自由に考えてください。)(解答欄略)

問5. あなたは人と話をしています。相手は自分のペット (犬のポチ) の自慢話をしていて、いっこうに話をやめてくれそうにありません。あなたは、特に用はないのですが、相手の話にうんざりしていて、もう帰りたいと思っています。こんなとき、あなたなら、話を切り上げてもらうためになんと言いますか。相手が目上の男性、女性の場合、対等の男性、女性の場合、目下の男性、女性の場合の6通りを考えて下のカギカッコに入れてください。(必ずしも、全部が違う答えでなくともかまいません。言い訳や、嘘の口実など、御自由に考えてください。)(解答欄略)

質問はこれで終わりです。どうもありがとうございました。なお、このアンケートに対する御意見、御感想や、会話を終わらせる際に心掛けていることなどございましたら、下のスペースに御自由にお書き下さい。

[注]

- 1 東北大学平野日出征先生の御教示による。
- 2 会話終結ストラテジーに関する先駆的研究としては、Clark & French (1981) が挙げられる。日本語に即した研究としては、岡本 (1990) が、以下のように会話終結のストラテジーを分類している。
 - ①前終結 (pre-closing) のストラテジー
(1.総括の表現 2.会話のまとめ 3.結論を述べる 4.結論の確認 5.話題の呼び戻し 6.殺し文句、落ち 7.外部事情の提示)
 - ②いとまごい (leave-taking) のストラテジー
(1.再接触の約束 2.感謝、詫び 3.お互いの幸せや健康を祈る 4.伝言 5.別れの言葉)
- 3 ペットに言及するストラテジーは対目上の場合にも用いられるものの、「ペットを褒めている」例は男性にはなかった。
- 4 今回のアンケートの欄外に、女性のこのような意見があった。「目下には性別で差がつかないような気がする」(50F1)

[参考文献]

- 井出祥子 (1997) 「女性語の世界～女性語研究の新展開を求めて～」『日本語学叢書 女性語の世界』井出祥子編、東京、明治書院、1-14.
- 岡本能里子 (1990) 「電話による会話終結の研究」『日本語教育』 72号、145-159.
- 熊取谷哲夫 (1992) 「電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析」『日本語学』 9月号、明治書院、14-25.
- 鈴木睦 (1993) 「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から—」『日本語学』臨時増刊号、明治書院、148-155.
- 堀口純子 (1997) 「会話の終わり」『日本語教育と会話分析』 東京、くろしお出版、26-35.
- 水谷修 (1982) 「「別れの言葉」総論～別れの言語行動～」『言語生活』 363号、筑摩書房、18-24.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness, Some universals in language usage*. Cambridge ; Cambridge University Press.
- Clark, Herbert H. and Wade French (1981) Telephone goodbyes. *Language in Society*. Vol.10. No1. 1-20.
- Gumperz, John J (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge ; Cambridge University Press.
- Ide, Sachiko (1992) Gender and function of language use: Quantative and qualitative evidence from Japanese. *Pragmatics and Language Learning*. Vol.3. 117-129.
- Lakoff, Robin (1975) *Language and Women's Place*. New York ; Harper and Row. (かつえ・あきば・れいのるず訳 (1985) 『言語と性～英語における女の地位～』 有信堂)
- Levinson, Stephen C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge ; Cambridge University Press.
- Rundquist, Suellen (1992) A gender study of flouting Grice's maxims. *Journal of Pragmatics*. Vol.18. 431-449.
- Schegloff, Emmanuel and Harvey Sacks (1973) Opening up closings. *Semiotica*. 7.4. 274-327.
- (北澤裕、西阪仰訳 (1995) 「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学～知と会話

～』マルジュ社、177-241.)

Tannen, Deborah (1990) *You Just Don't Understand*. New York ; Ballentine Books.

Tannen, Deborah (1996) *Gender and Discourse*. Oxford ; Oxford University Press.

(東北大学文学部 4 年生)